

働くことにおいて利他の精神は必要不可欠ですが、この精神を顕著に表わしたものに奉仕活動があります。皇居と赤坂御用地で清掃活動などを行なう「皇居勤労奉仕」があります。諸手続きを経た多くの方々が全国より参加し、戦後六十七年間継続されています。この奉仕活動に参加した会友もいることでしょう。

始まりは、宮城県栗原郡の青年団員の純粋な日本を愛する心と、申し訳なきから発した行為でした。終戦直後、国会議員の秘書官をしていた長谷川峻氏が郷里の栗原に帰った際、皇居周辺が荒れ果てているという話をしました。それを聞いた青年たちは、皆で相談し、戦火で荒れてしまった外苑の草むしりなどの清掃活動をさせていただくことと決意します。

終戦直後の昭和二十年十一月、青年団の代表として皇居の坂下門を訪れた鈴木徳一氏と長谷川氏は、宮内庁の職員に青年たちの思いを伝えました。職員は二人の話を聞いて感激します。

翌月の十二月八日に第一陣の奉仕団約六十名が、交通機関もままならない中、約二十キロ近く離れた寄宿舎から皇居に通いながら、すべて手弁当で四日間の奉仕作業を行なったのです。

戦後アノミーが広がり、自分が生きることに関心一杯だった当時は、GHQが目を光らせ、皇室のために奉仕する行為について逮捕される可能性が大いにありました。それを覚悟していた団員は、宮城を離れる際、親類と水杯を交わして出発した人、皇居をきれいにする付けないと日本が立ち直れないとの意志で参加した人など、様々な思いを抱いて上京したようです。

経緯をお聴きになられた昭和天皇は一言話したいと、奉仕活動をする団員のもとに突然に訪れ、三十分ほど郷里や道中のことなどを質問されました。御会釈が終わって、感極まった団員たちは陛下が踵を返しお

喜働の精神が 新しい日本を創造する



絵・今谷 鉄柱

帰りになる後姿に向って「君が代」を誰ともなく唄い始めます。陛下は足を止められ、皇居に響く歌声をじつとお聴きになられていたそうです。その後、全国にこの話が伝わり、現在のような皇居勤労奉仕へと繋がっていきました。

青年たちの行為は一面、自身を含め親類にも影響が及ぶ可能性のある無謀な行為がもしもありません。しかし戦後の人世を鑑み、せずにはいられないとの情念から発した行為は、多くの人に感動を与え、日本再建の一步を進むきっかけの一つとなったのです。

働きには様々な段階があります。イヤイヤ・ダラダラ、惰性、打算のレベル、ガンバリズムに陥り、独りよがりレベル、働く喜びに溢れているレベル、働かすにはいられないという感謝報恩のレベル、仕事そのものが楽しく喜びに溢れ遊んでいるのと同じ感覚のレベルです。は働き手の心が自分本位の思考傾向があるのに対し、は相手優先の思考傾向であり、利他の精神が強いという違いがあります。倫理運動の創始者・丸山敏雄は働く人の心を、次のように記しています。

「己が何も求めずに働くとき、その働きに応じて報いられるというところが倫理の原則であることが明らかにされた。故にこれまでの世の勤労者の働きとその心構えは、まるでさかさまになっていたのである。それは、飽くなき己の欲望のために働いていたのである。そして「働けど働けど我が生活楽にならざりじつと手を見せ」ことになったのは、当然である。

利他の精神に溢れた奉仕の精神を日常生活や仕事に活かし、感動と喜び溢れる環境を創造していきたいものです。この輪の広がりこそ、日本が創造的に変わる大きな原動力となるのです。